長洲小だより 第6号

発行　長洲町立長洲小学校
長洲町長洲1776番地
TEL　0968(78)0109 fax　(78)7103

令和４年７月６日（水）

６年生の授業公開（示範）

６月１７日（金）に、６年生が「主体的に学ぶということはこういうことだ！」ということを示すため、下学年の子供達に授業を公開してくれました。独特の雰囲気の中で６年生は緊張したかもしれませんが、次々と自分の考えや意見、質問を主体的に発表し、他学年にとってとても学びの多い時間になったようです。「６年生のこんなところを真似したい。」という感想も聞かれ、充実した時間になりました。６年生は授業後も振り返りを行っていたようで、その謙虚さに私達教職員も見習わなければなりません。今後も６年生は率先垂範を体現してくれることでしょう。

【　６年生公開授業　家庭科　】

児童総会開催

６月２４日（金）の３時間目に児童総会が開かれました。学校をより良くしていくために、１年生から６年生まで子供達全員が議題について話し合いました。今回の総会で議決されたのは３点でした。①トイレの使い方の改善、②室内での生活の仕方の改善、③給食の残さいを減らすこと、の３点です。今後、６年生を中心に話し合われ、具体的に何を行っていくのかが示されます。長洲小学校ではこのような児童会組織が自治的に機能しており、子供達の意見が十分に反映された学校生活が展開されています。

【　児童総会でクラスの意見を言う６年生　】

「心のきずなを深める月間」に寄せて

６月は「心のきずなを深める月間」として、全学級で人権学習を中心とした「心」を耕す学習が展開されました。その一環として７月８日（金）の５時間目は授業参観で、人権学習を実施します。お忙しいところとは存じますが、子供達の真剣に学ぶ姿を是非ともご参観くださいませ。

さて、「心のきずなを深める月間」の後半、６月２７日（月）２８日（火）の業間の時間に、校長講話を行いました。月曜日は高学年、火曜日は低学年で、共通するお話ではありますが、学年の実態に合わせて話しました。大きく２点です。

１点目は「思いやりの心」を持つこと。孔子の「己の欲せざる所、人に施すこと勿れ」つまり、自分がされて嫌なことは他人にも絶対にしないということです。言葉や行動を起こす場合において、相手のことを思いやっていれば軋轢は生じないはずです。

２点目は「見て見ぬ振りをするな」「行動を起こせ」ということ。ここでも孔子の言葉を引用しました。「義を見て為さざるは、勇無きなり」つまり、目の前に困っている人、苦しんでいる人がいるのに、手を差し伸べ、心に寄り添うことをしないのは、勇気が無いことと同じだということです。ネット上のいじめとよく似た構造です。

子供達には、６月だけでなく一年中、いや一生学び続ける必要があるのが心の学習（人権学習）だと伝えました。人を思いやる心を持っているのか、目の前で起きている負の出来事を見て見ぬ振りしていないだろうかと、振り返ることができる毎日を送りたいものです。

4年生のあいさつ運動

6月終わりから4年生が自主的にあいさつ運動を行っています。梅雨明けの暑い朝に元気なあいさつの声が響いていました。見守り隊の皆さんも笑顔で褒めてくださり、「このような活動が、長洲町全体に広がると良いですね。」とおっしゃっていました。

子供達の朝からの様子を眺めていますが、あいさつの実態には個人差があるようです。あいさつは互いの気持ちの距離を縮めることができます。積極的にあいさつするようにしましょう。

【　４年生のあいさつ運動　】

七夕について

七夕は「星祭り」とも呼ばれ、旧暦（太陰太陽暦）の7月7日に行われてきました。現在使っている新暦（太陽太陰暦）にすると、今年の七夕は8月4日らしいです。国立天文台では２００１年から旧暦の七夕を「伝統的七夕」としています。少しややこしくなりますが、二十四節気の処暑の日かそれより前で、処暑に最も近い新月を含む日から数えて7日目が「伝統的七夕」の日となります。国立天文台によると、伝統的七夕の日あたりは一般的に梅雨が開けた後であり、晴れになる確率が高く、月は夜１０時過ぎには沈み、天の川がよく観察できる条件が整うのだそうです。新暦の七夕よりも、旧暦の七夕の時期の方が、天の川がきれいに見えるようですね。

☆七夕はいつから始まった？

七夕はもともと中国の行事で、日本には奈良時代に伝わったとされています。

☆平安時代の宮中行事

平安時代には、七夕は宮中行事として行われるようになりました。お供え物を並べ、貴族たちは星をながめて歌を詠んだそうです。女性たちは針に5色の糸を通して供え物と一緒に並べ、裁縫が上手になるようにと祈ったようです。また、願い事を梶の葉に書いたという記録もあり、これがその後、短冊に願い事を書く習慣になったといわれています。

☆七夕の由来

七夕の由来といえば、「織姫と彦星」の伝説が有名ですが、実はそれを含めて、3つの説があります。

「織姫と彦星」

こと座のベガとわし座のアルタイルは、天の川を挟んで並び、七夕の頃、夜空でひときわ輝きます。中国の人はいつしか、七夕を年に一度、ベガ（織姫）とアルタイル（彦星）が出会える日と考え、「織姫と彦星」のストーリーが生まれました。

☆「織姫と彦星」の七夕物語

天の神様には「織姫（おりひめ）」という娘がいました。織姫は、毎日毎日、機織り機の前に座って、美しい布を織っていました。神様は毎日熱心に仕事をするにピッタリの結婚相手を探すことにしました。神様が地上の若者を探していると、一生懸命、牛の世話をする一人の若者がいました。「彦星」です。二人は結婚すると、とても仲良く暮らしました。ところが、しばらくすると二人は仕事をしないで遊んで暮らすようになってしまいました。織姫が機織りをしないため、天の服は足りなくなり、彦星が牛の世話をしないため、牛たちはやせてしまいました。神様が注意しても、二人は言うことを聞きません。怒った神様はとうとう、織姫を天の川の西側に、彦星を東側に引き離してしまいました。離れ離れになった二人は悲しむばかり。これには神様も困ってしまい、二人に、「毎日、一生懸命仕事をするなら、年に一度、7月7日だけ会わせてあげる」と約束しました。こうして二人はまた一生懸命仕事をするようになり、毎年7月7日の夜だけ、会うことができるようになりました。

☆短冊に願い事を書いて笹竹に吊るす

七夕は、中国の宮中行事だった「乞巧奠（きこうでん）」が日本に伝わり、日本古来の「棚機（たなばた）」と融合し、宮中や貴族の女性たちが針仕事の上達を願って、織姫と彦星に祈る行事となりました。その時、笹や竹はお供え物として捧げられました。それがいつしか宮中で、梶の葉に和歌を書き、書の上達を願う風習とも合わさり、短冊に願い事を書いて笹竹に吊るすようになりました。

☆七夕の短冊や笹竹はいつからいつまで飾る？

七夕は、7月7日に年に一回だけ会うことが許された織姫と彦星の伝説がもとになっています。なので、七夕の短冊や笹竹は「一夜飾り」つまり、前日の6日の夕方に飾り、7日には片付けるのが本来の飾り方です。

☆七夕の短冊の色や飾りの意味

願い事を書く七夕の短冊は通常、5色があります。その色や短冊以外の飾りそれぞれ意味があります。

古来、中国では世の中は「木・火・土・金・水」の5つの要素からできているという考え方「陰陽五行説」があります。この5つの要素にそれぞれ「青・赤・黄・白・黒」の色が定められています。平安時代の貴族の女性たちが、針に5色の糸を通して裁縫が上手になるようにと祈ったと述べましたが、その糸の色にも陰陽五行説が採用されていたようです。短冊としては、黒は後に紫に代わり、青は緑が使われることもあります。また5色は人間の5徳を表しており、それぞれの次のような意味があります。

青（緑）：仁（徳を積むこと）
赤：　礼（父母や祖先を敬うこと）
黄：　信（友達を大切にすること）
白：　義（約束を守ること）
紫：　智（学問に励むこと）

☆七夕飾りの意味

七夕には、短冊のほかにもいろいろな飾りがあります。

折鶴（千羽鶴）：長生きを祈る
吹き流し：　裁縫が上手になることを祈る
網飾り：　魚をとる網を意味し、豊漁を祈る
巾着（財布）：金運を祈る
神衣・紙衣：　紙で作った人形で「かみこ」と読みます。着るものに困らないことを祈るとともに、災いごとの身代わりになってもらいます。
くずかご：　整理整頓や節約の心を身につけることを祈ります。

子どもの頃7月7日は晴れるかどうか気をもんでいたことを思い出しましたが、調べてみると旧暦の7月7日、今年は8月4日頃と分かり、なるんだ、8月初めに七夕すれば良いじゃないかと、都合よく判断してしまう私でした。織姫と彦星の物語もあって、子どもと天の川が見えるかどうか、盛り上がる家庭も多いのではないでしょうか。

コロナ禍のここ数年は各地の七夕まつりは中止のところが多いようですが、夏休み中、ぜひご自宅で七夕を楽しんでみてください。旅行も少々はばかられるこの頃です。家族みんなで短冊に願い事を書いて、２０２２年、今年の後半何事もなく元気で過ごせるよう、また自衛隊、消防、警察、医療、福祉、行政、多くの現場で尽力されている皆様の無事をお祈りしましょう。